談話

第五週

五月は月の始めにお節句がある。人形の飾られたお遊戯室にみんなが集つて、おはなしをきいたり、遊戯を見せて貰つたり、自分達もピアノに合せて唱つたり、遊戯をしたり、ごうやら一かゞ組としての責任をしおふせられて、室にかへれば、一人づゝへのお菓子が待つてゐる。思ひがけない嬉しさ。何となく樂しくもあれば、いよいよ安心もする、こゝろも彈む。

こんな事でもあれば、いよ〳〵いつ迄もだまつてはゐられないで、又聞いてばかりゐられないで、互ひに話しが始る。そこで、先生から與へられるおはなしを聞いてゐるといふ受動的な立場ばかりでは面白くなくなる。自分達も何か言葉にあらはして云つて見たい、云はせて見たい、斯ういふ機會を與へることを保姆は考へねばならない。一日中に一人づゝ萬遍なく話相手になつて居られゝばいゝが、まだ片方に手のかゝる子が二三人もあることするこ、ついその方にかゝつてしまつて、或る子は無言で登園して、無言で別れてしまつたといふ事が無いこも限らない。

この入園後一月位たつてから、もうそろ〳〵口をきく子、きかない子を見出して、口をきかない子供へはいゝ對策をこつて行かなければ、間に合はない。

この話したい心を滿足させるためこ、口をきくのは厭だけれごも、皆こ一緒なら云へるこいふ子供のために、ごく短い詩の吟誦をする。

雨(吟誦)

雨はごこにも降つてゐる
家にも木にも降つてゐる
傘の上にも降つてゐる
海の船にも降つてゐる

この詩は、ごく短いここ、雨が子供に親しいここ、情景が

すぐ浮び出ることゝ等で最もいゝ材料である。

これは英國のスチブンソンの有名な詩であることは周知のことであるが、この譯し方がいゝ。同じ原詩でも

雨が方々に降つてゐる
青い野原に木の上に
こゝぢやぼくらの傘の上
あすこの海ぢや船の上

と譯したのもある。これでは幼稚園のあの年齢の子供には使はれない。前者に譯したわが國の詩人に、今更のやうに敬意を拂ひたい氣持だ。

さて、雨の降つてゐる日に、みんなを先生のまはりに腰かけさせる、幼兒の方からは降つてゐる雨がよく眺められる位置に腰かけて。

「今日は先生が、雨のうたをよんで見ますから、聞いて居て下さいよ、靜かに聞いてゐて下さいね」

といふ。いつものやうにお話しからと思つてゐたのに、今日は違ふのだと云つた表情で目を瞠る。聞かうとして待つてゐる狀態になつてから始める。

雨はどこにも……
……

と聞かせる。二度三度、靜かにはつきり繰り返して、全體の情景を幼兒の心の中に浮びゐがゝせる。

しばらく間をおいてから、

「ではみんなで一緒に云つて見ませう」

と云つて、一句づゝ先生と一緒に暗誦し、最後に全部をつゞけていふ。先生は少し早いめ早いめに、子供がまごつかぬやう先がけをしながら。

一日おいてからこれを再びする。先生は段々小さい聲で時々援ける。そこで發表力もあり、記憶もたしかなと思ふ子に一人で云はせて見る。

吟誦用の詩は、選ぶのになか〳〵見當らない。雨の詩も長い間つゞけて來たので、何か新らしいものをと思つて、探して見るけれど、この詩ほど幼兒向きで、香氣の高いものはめつたに無い。唱歌にしても、おはなしにしても、このやうに永遠性のあるものが時々あるものだ。用ひる度にいいなと思ふ。

こっつかうかくっつかうか

正直なお爺さんには小判がくっつき、悪いお爺さんには松脂がくっつく、行爲の正邪よりも、こっつかうか、くっつかうかの發音の繰り返しによつて面白く話す方がいゝ。

花咲爺(人形芝居)

日本昔噺の一つ、花咲爺は人形芝居で。但し。人形芝居では、あの話の始めからの筋を、その通り演じてはゐられない。舞臺で見るところは、花を咲かせるのが主となるので、大てい殿樣のお通りから始る。すると、一人のお爺さんの花はパッと美事に咲き、一人のお爺さんのは、どうしても咲かない、咲かないばかりか、叱られて、お咎めを受ける。これを幼兒は熱心に見てゐる。

年長組にもなれば、わけはわかるが、前の因果關係がわからないで、片方だけが悪い結果になるといふのは、その場面だけ見てゐると、どうかと思はれる。殊に年少組の最初に見る時、筋の前提なしでいきなりでは、一寸不安に思はれる。

それ故、この芝居を見る前に一度、話して聞かせておいて、正直爺さんの花の咲く所以を知らせておく方がいゝ。

どうかすると、わかり切つてゐる筈と思つてあんまり氣にも止めないことがある。それがかなり大事なことで、そこから始めないと、單純な幼兒の心を混亂させることが、あとで氣がつく事が往々ある。

第六週

赤ん坊爺さん

若くなる水を飲んで、たう〳〵赤ちゃんになつてしまふ、これもわが國昔噺の一つ。

四季について

世間ばなしをそろ〳〵始める、何でもいゝ、例へば、今朝は大變電車が混んで、やつと幼稚園まで來たとか、途中で可愛いゝ小犬にあつて、一寸撫でゝ來たとか、大したことで無いことを話す。子供の方でも、そんなことなら私も話したいことがあるといふわけで、今日はお兄さんの學校の運動會で、海苔巻きのお辨當だとか、昨日の歸りに祖父樣のお家に寄つたとか、話し出す。こんな世間ばなしをしたあとなどで、

「今日は何日でせうね」ときいて見る。まだ知つてゐる筈はないから今日は五月何日と云つて、子供にも云はせる。それから一月　二月　三月……と、五月以外の月を云はせる。そして、今は春で、もうすぐ夏になることを知らせる。たゞ春、夏と名稱を云つてもわからないから、お正月の寒い時、雪の降る時とか、あつい頃海に遊びに行く時とか、おぼろげながらも經驗をたゞらせる。

この後も折々話の始めなぞに月或は、春夏をきいて見る、急がないで修了迄の間にくり返してゆく。

第七週

三匹の小豚

有名な話であるから、今迄に聞いて知つてゐるもの二三あると見て。取扱上特別なことは無いが、最後に煙突から飛び込んでしまひました位に止めて、燒け死んだまでは云はない方がいゝ。一度に限らず、この後二三度する。

てんとむし（吟誦）

やはらかい綠のクローバーの葉かげに、又はバラのつるに、てんとう蟲は寶石の一粒のやうに、まんまろく靜止してゐる。小さい手がそれへスーッとのびたと思ふと、眞赤な寶石はパッと飛ぶ、漸く摑えて、掌の上に乘せれば、又靜止してゐる。愛すべきてんとう蟲は、この頃庭に出た時の子供のよろこびである。てんとう蟲のうたは、折からこの興味に合つて、案外早くおぼえこんでしまふ。

てんとむし

たばこの好きな爺さんが
廣い野原の眞中で
マッチをなくして大さわぎ
見ればさいわい足もとの
草の葉つぱに火が燃える
爺さんあはてゝ腰まげて
煙管の雁首もつてゆきや
大事な大事な火は消えて
パッと飛び立つてんとむし
眞赤な眞赤なてんとむし

東郷元帥

五月廿七日、海軍記念日に、日本海々戰の話は年長組に

して、年少組では、海軍の偉人東郷元帥の話をする。寫眞を飾つておいて。

觀　察

第五週

かめ

子供達も大體慣れて恰らの生活が出來る樣になるこのごろは、一方その度を越した男兒が表れる樣になる。その時分動物を飼ふことは何かいゝものである。

町にもそろ〳〵龜を賣出す樣になるからそれを二、三匹買つてくる。或は金魚屋にたのんで持つて來て貰ふ。理科材料店にたのめばいゝがそうしなくても手近に得られる。この龜もあんまり大きくない方がいゝ。保育室で飼ふには水槽又は水盤におたまじゃくしを飼つた時の（前號年長組參照）注意を同樣にすればよい。言ふ迄もなくこれは爬蟲類で、多くあるのはくさがめ（いしがめ科）である。かたい甲にさわつて見させるもよいが力を入れておさない樣に、小魚なぞ時々與へる。みてゐればあきずに面白い。切紙、自由畫、ぬり畫等ひとりでに子供は表現しやうとするであらう。

第六週

小鳥

お庭にある小鳥の家を訪ねるのは始めてゞはない。殊にまだ先生の側を離れられないこどもにとつては寧ろ行き慣れたところであらう。毎日の樣に聲を聞き、餌を啄むのも見てゐる、が氣を附けてよく見てゐる子供達許りとは限らない、そこでみんなで小鳥小屋を訪れることにする。ちやうご巣に入つてゐるのがあつたりすればよい機會である。それにしても手ぶらで行くよりお土產があつた方が、それも子供達と一緒に摘んだはこべなんかであり度い。そのお土產をやり乍ら、どんな鳥がゐるか簡單な特徵を注意す